平成 26 年 3 月発行

月の館 通信

信濃観月文庫

麻績村
発行／信濃観月苑
長野県東筑摩郡麻績村麻 8059-2
TEL・FAX (0263)67-3933

第23号

姨捨観月 二つの旅

玉城　司（信州古典研究所所長）

Ⅰ 一紅『文月浅間記』―浅間山噴火記

最近、富士山が噴火したら、どの程度の被害があるか、という災害シュミレーションが、発表されました。富士山は宝永四年（一七〇七）の大噴火以来、三百年ほど大きな噴火がない休火山状態ですから、いつ噴火しても不思議ではありません。

浅間山は、二三一年前の天明三年（一七八三）七月、大噴火しました。この記録がいくつか残っていますが、羽鳥一紅の『文月浅間記』は、惨状を女性の視点から和文で記している点に特色があります。

一紅は、伝聞した「宝永の富士山大噴火」の惨状を思いながら、利根川に流された人や牛馬、家屋が濁流に飲み込まれる様を「世界一度に泥の海となるこそかゝる時や来ぬらん。気もたましゐも消えはてぬ」と嘆いて、次のように書き記しています。

さばかりおそろしき中に若き男、老たる母とおさなき子をふたりつれたるが、子を捨て母を負ひ、ながれ行く。母声をあげて、我を捨て子どもをたすけよと泣きさけぶ…

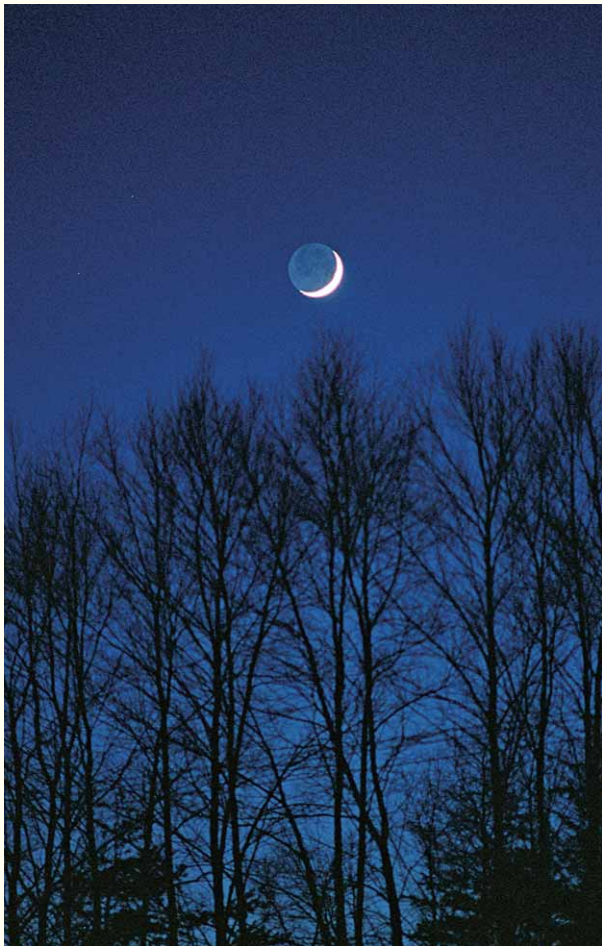
（徳田　進『新考　文月浅間記』芦書房）

濁流に飲み込まれ、自分の子どもを犠牲にして老いた母を助ける孝行息子、その息子に「我を捨て子ども（孫）をたすけよ」と叫ぶ老母。親子の情愛が時代を超えて私たちの胸を打ちます。

＊

一紅は、享保九年（一七二四）上州下仁田（現群馬県富岡市）に生まれ、高崎の絹問屋羽鳥勘右衛門に嫁し、寛政七年（一七九五）八月二十三日に他界。夫（俳号麦舟）とともに建部綾足（一七一九～七四）に師事して、俳諧を嗜みました。

綾足は、俳人ですが、画家・読本作者としても知られています。騎西（埼玉）や上州、信州で門人を得て、俳諧師として生計を立てることができるようになったにも関わらず、宝暦十三年（一七六三）、俳諧の発句を「片歌」と呼ぶこと、連句を廃して二句一章で詠むことを勧めました。俗な文芸である俳諧を和歌的優美な雅の文芸とすることを目指し、俳諧を否定したのです。そのために文章も平安朝の歌物語に倣った擬古文（和文）で書こうと提唱しました。俳諧の多くの門人たちは、綾足の教えについて行けなくなりましたが、一紅は、最後まで師の教えを守りました。浅間山の噴火記『文月浅間記』が和文で書かれているのは、師説を守ったからです。



Ⅱ 一紅『草まくら』
―明和三年（一七七六）の姨捨観月記

羽鳥一紅がはじめて和文にふれたのは、『文月浅間記』を書く十七年前の明和三年（一七六六）でした。この年八月四日、実父が他界。一紅は、実家のある下仁田へ行き、八月十二日頃、下仁田から信州の善光寺に向けて旅立ち、その旅を『草まくら』（草稿）にまとめました。道連れは、下仁田の富農で手広く商業も営んだ冨永如白の妻・柳旨と同地の友人・芙白、和青の女性三人と雲裡坊門の俳人で手習いの師匠・反哺（男性）でした。

『草まくら』は、発句入りの俳文で書かれていましたが、師の綾足は、文章を和文に直して、発句を片歌と言い換え、書名も『片歌久佐麻久良』と万葉仮名で記し、姨捨山観月の図（挿絵）を入れて出版しました。一紅らの旅の足取りをたどってみます。

八月十二日頃、下仁田から善光寺へ向けて出立。内山峠を越え、野沢～小諸～上田へ。

八月十五日　姨捨山で観月。

八月十六日　夜明けに出発善光寺へ　福昌院に宿泊苅萱堂など訪問。

八月十八日か十九日　水沢（篠ノ井辺）で重信（真田信之三男）の墓参。その後、松代で競馬の祭見物。

八月二十日頃　横吹坂から笄の渡しを見て、坂木（城）へ。

八月二十二日　上田の井筒屋で宿泊。

八月二十三日　上田を出て堀村に反哺の母を訪ねる。

八月二十五日頃　小諸に出て、浅間山を眺め、軽井沢を経て、下仁田に帰着。

当時、善光寺は、死者の魂がとどまる霊所とみられていました。四十九日の前に参詣したのは父の菩提を弔うためですが、それ以前の八月十五日、姨捨山で月見をしていることに注意されます。姨捨山で一紅は、

おば捨や月の照夜は寒からん
（草まくら）

と詠みました。この句は、

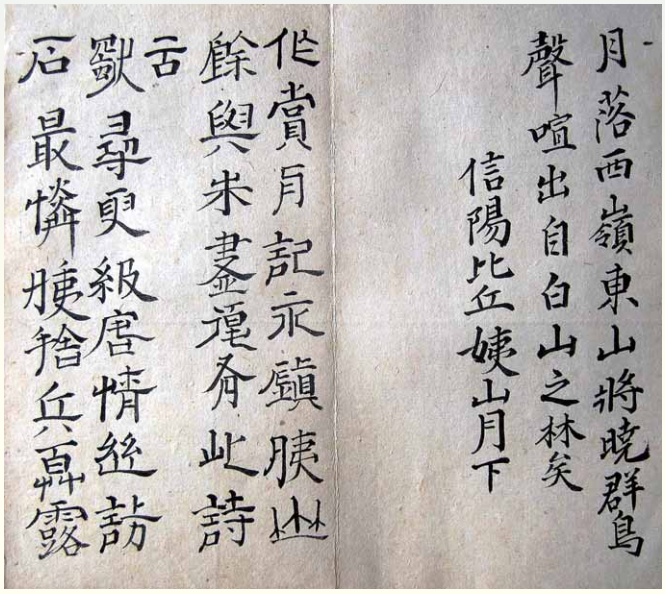
おもかげや姥ひとりなく
月の友　（更科紀行）

という芭蕉の句に応えて、ひとり泣く棄てられた姨に「名月が照らす夜はさぞや寒いでしょうね」と呼びかけたものです。一紅は、八月十五日の仲秋の名月を姨捨山で仰ぐために、日程をあわせて下仁田を旅立ったのです。父の菩提を弔うことと芭蕉の足跡を偲び、追慕することが同じ比重であったことがうかがわれます。この旅は、貞享五年（一六八八）の芭蕉「更科紀行」の旅から数えて、七十八年後ですが、一紅にとって芭蕉は父祖のような人であったのでしょう。

Ⅲ 信陽比丘『姨捨山賞月記』
―元禄八年（一六九五）の姨捨観月記

芭蕉が亡くなったのは、元禄七年（一六九四）十月十二日です。その翌年に、一人の修行僧が姨捨山での月見を『姨捨山賞月記』にまとめました。元禄四年に出版された『説法用歌集』に収録されている姨捨山の歌や詩を読んで、それに刺激・影響されて、姨捨観月を思い立ったと述べています。結びに「以前から、姨捨の名前は天下に知られ、詩歌に委曲をつくしているが、「遊情」禁じがたく、観月記を記した。記し終えて、辺りをみわたすと月が落ち、西から東から群れた鳥の鳴き声が聞こえ、白んだ山林が喧噪につつまれている」と感動を書きとめています。

この本は、折本二巻。和文と漢文の両方で書かれ、経典



や書道の法帖のように仕立てられています。識語に「信陽比丘謹書」とだけあるだけで、修行僧の名前は判りません。本文から年齢は二十七歳だろうとうかがえますが、芭蕉とは面識がありませんでした。

興味深いことに、これには「木花開姫」の娘「木花姫」が、母のお姉さん「大山姫」（木花姫にとって伯母）と信州の姨捨山に連れだってきたという不思議な「神話」が記されています。伯母は、「形あしく生れ付給ひ、心もあくまでたけく、ましくて、他のよみする事わざをねたみ、他のうらふるをよみし給ふ。年四十を過させ給ふまで、誰むかひとり妻となし暮さんといふ人もましまさず…」という風だったので、姪の「木花姫」は伯母の嫉妬心や羨望心など醜い心を捨てるには北国の「満底の月を詠じ給ふにしくハなからめ」と勧めて、姨捨の地にやってきた、というのです。

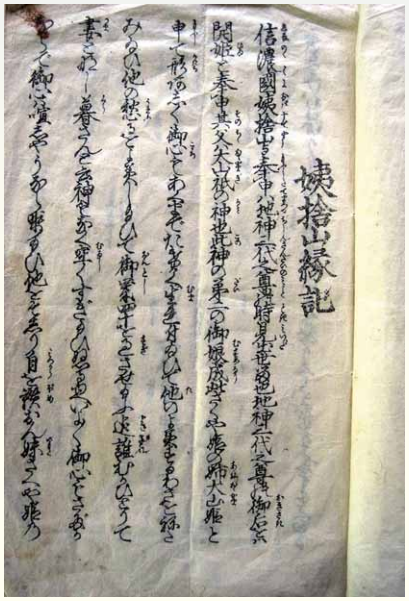
伯母は、「ばんぢやく（盤石）」の上に登り、「空に目をとぢて暫く目をひらきて、東西南北を見るに大河に満月うかみ、小川に或ハ四方の草葉における露までも月影ハ普く移りかゝやけるを見て、さてハ田毎円満の月ハ是ならんと感心有り」と醜い心を捨て、悟りを開いて、普賢菩薩として示現しました。姨石は、伯母が、醜い心を捨てたことから命名されたと言います。江戸末期ころから流布したと思われる『信州姨捨山縁記』も、この本の系譜にあると思いますが、これ以上深入りしません。

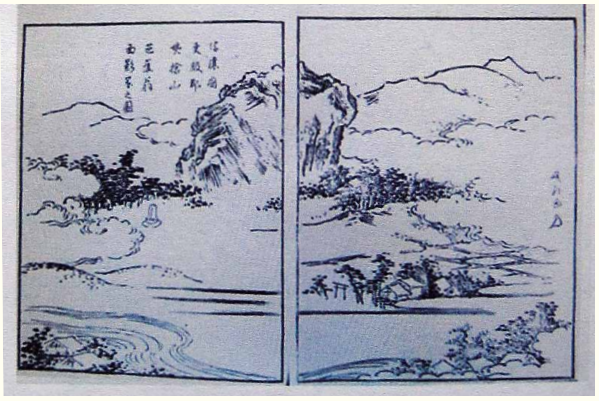
仏教で「明月が夜の闇を照らすのに喩えて、私たち衆生の迷妄を破り、悟りを開かせてくれる」月を「真如の月」と言いますが、醜い心を捨て、悟りを開いた地こそが「伯母捨山」だったことになります。信州の姨捨山は、『大和物語』以降、棄老伝説の地として詩歌に詠み継がれてきましたが、一方で、迷妄を捨て、悟りを開く救済の地であるという伝承が芭蕉の時代ころからあったことが確かめられます。

Ⅳ 一紅『片歌久佐麻久良』と加舎白雄『おもかげ集』

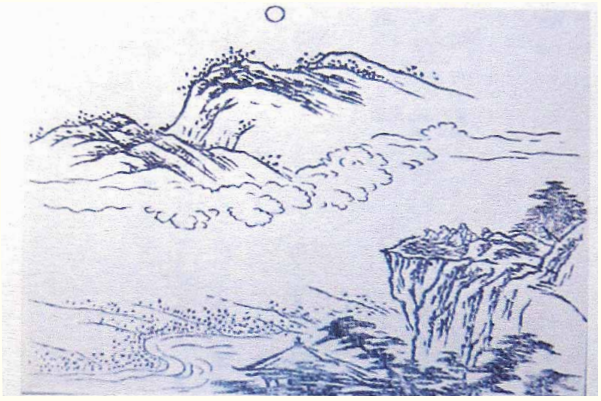
さて、明和六年（一七六九）加舎白雄は、姨捨山長楽寺境内に「面影や姨ひとり泣く月の友」の芭蕉句を刻んだ碑「面影塚」を建立しました。先にふれた一紅は、この三年前に姨捨山を訪ねました。興味深いのは、『片歌久佐麻久良』と『おもかげ集』の挿絵です。

『片歌久佐麻久良』の挿絵は、建部綾足が描き、『おもかげ集』は、眠江（岷江か）という人の画です。眠江は明和八年に出版された『俳諧百富士』の挿絵を描いた画師と同一人のように思いますが、よくわかりません。この二枚の挿絵は、ほぼ同じ頃に描かれた絵で、姨石の下方に長楽寺らしき建物が見えます。綾





明和六年『おもかげ集』



明和三年（1766）『片歌久佐麻久良』

足は姨捨を訪ねたことがあったので、実景でしょう。眠江の画にも同じように月見堂がお寺が見えます。ただし、綾足は姨石の上で鏡台山に登る月を仰いだ図を、眠江は逆方向から姨石と面影塚を描いています。だから異なるのは、致し方ないのですが、綾足は姨石の上を平らに描いて、五人が月見をしているのに対して、眠江は姨石をこんもりとした山のように描いています。三年で石の形が変わるとは思われませんので謎です。

なお、先の『姨捨山賞月記』は、姨石の平な所は、東西八尺（約2m40cm）南北二十四尺（約7m30cm）あると記していますから、五人くらいは座ることができたように思います。ちなみに、天保五年（一八三四）二月に脱稿した井出道貞『信濃奇勝録』（出版は明治十九年）は、丸い姨石を描いています。

姨石がこんもりしていたか、平であったか気になりますが、姨捨の地の伝承は、棄老伝説と救済伝説のふたつの流れがあったことは確かです。月は、どこでも仰ぐことができますが、信州姨捨山は、棄てられた老人の霊をなぐさめ、共感する地であるばかりでなく、自らの醜い心を捨てて悟りを開く地、つまり救済の地であったといえます。

玉城 司 略歴

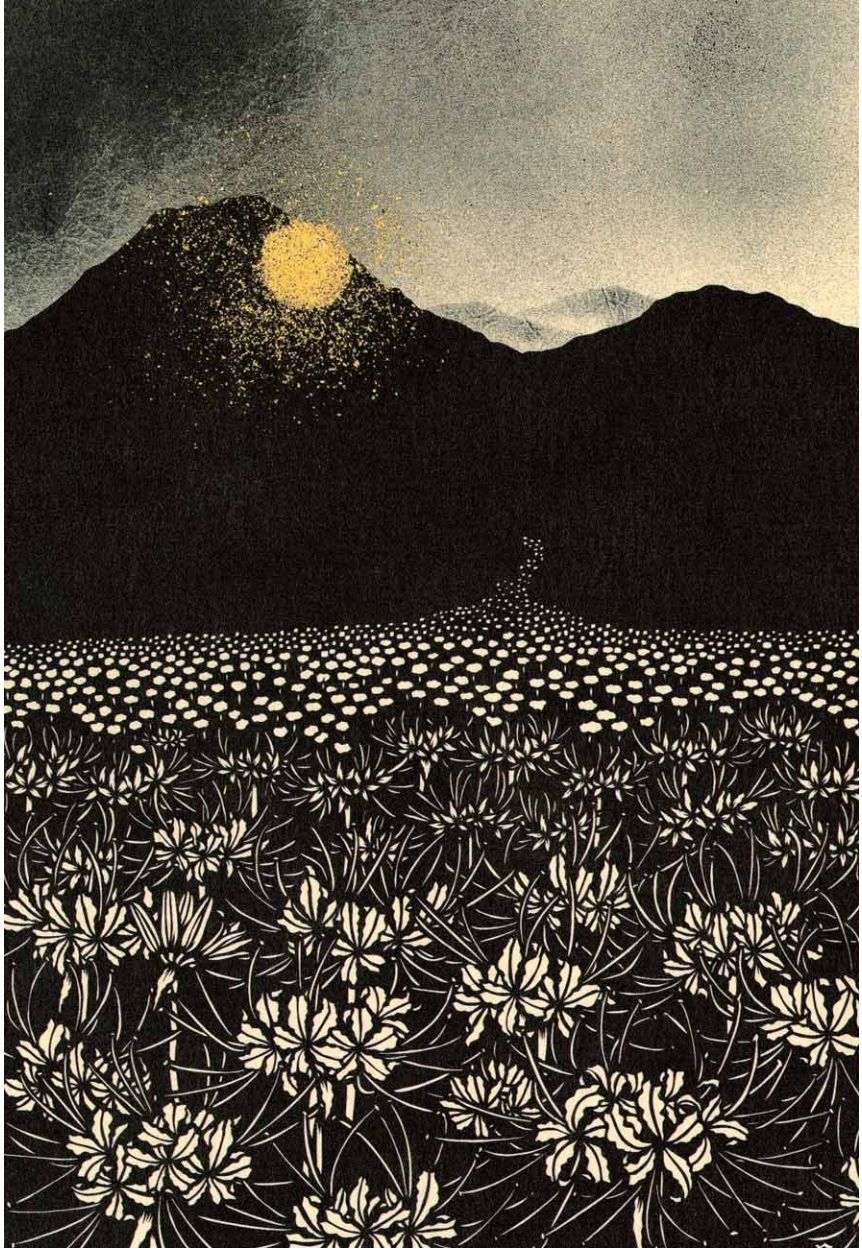
一九五三年（昭和二十八年）、長野市生まれ。特定非営利活動法人・信州古典研究所代表。早稲田大学大学院文学研究科修了。専攻は近世俳諧史。江戸時代中期俳諧、女性俳諧、大名文芸について研究中。

【著書】

『蕪村句集』（角川ソフィア文庫）。

『一茶句集』（同）。

『今昔詩歌ものがたり』（ほおずき書籍）など。



きりえと共に

日達 れんげ

きりえとの出会いは、私がまだ学生の頃のＪＲのストがきっかけです。家に帰れず宿泊させて頂いた友人の叔母様の家で見たきりえに心ときめき、自己流で作ってみたインド人女性のきりえが第一号だったように思います。当時インドに魅かれ、放浪の旅で出会った方々や、草花などスケッチしてはきりえにして楽しんでおりました。

やがて結婚し四人の息子達が生れ題材はいつしかインド人女性から和装の女性や子供と変わっていきました。

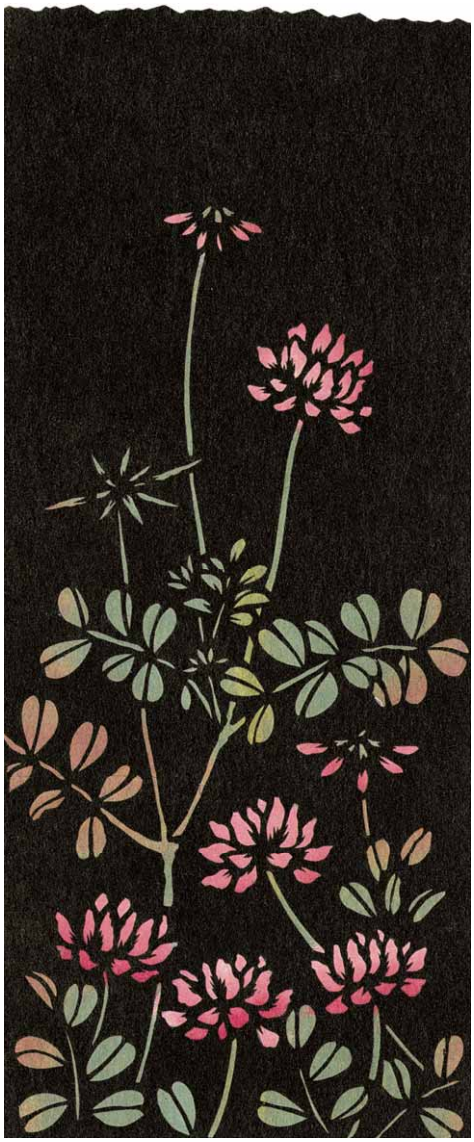
地元の新聞へのきりえ連載の依頼を受け、計十一年間は子育てをしながら生活のひとこまをきりえにして月二回の連載をしておりました。どんなに忙しくても子供が熱を出しても、しめ切りは待ってはくれません。

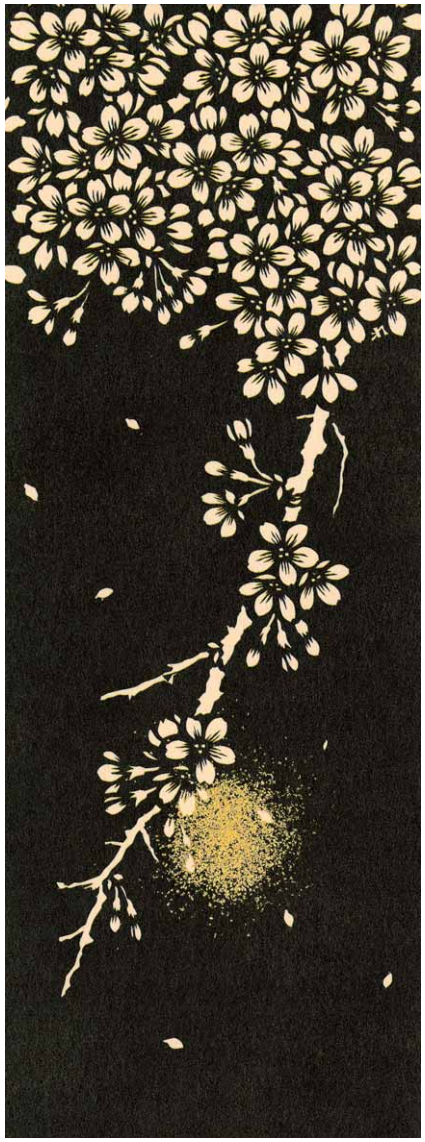
早め早めの原稿提出、日々きりえの材料をさがしていると子供達のなにげない言動、行動、旅先で出会った人々、草花、季節の風景などがいとおしく思えるようになりました。

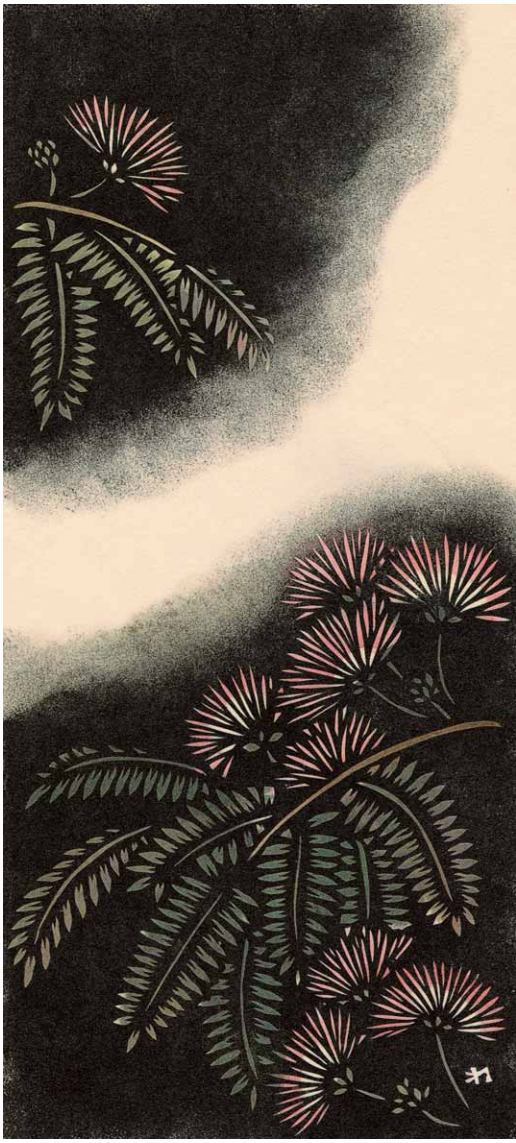
子供を叱った後きりえをすると、心の乱れが指先からカッターを通じ、作品にもしっかり表われてしまいます。これがきりえの魅力であり、こわい所でもあります。なので私はカッターを持ったら（特になくてもいつも）、平常心。穏やかな心で…が私の一生の課題です。

生まれ育った岡谷を離れ、夫の故郷である諏訪郡原村に引越したのは今から十三年前、八ヶ岳のふもと原村の森の中に夫が手作りで家を建て、四季を通じて森からの恵を頂きながらの日々、私のきりえはいつしか山野草や高山植物へ変わっていきました。毎朝森の中を散歩する時、ベニバナイチヤクソウがピンクのジュータンのように咲く光景を目のあたりにしたりと、山野草の宝庫である私達の散歩道で沢山スケッチさせてもらいました。

森の中のモデルさん達は、







「どうぞどうぞ」とおしげなくその美しさを私に提供してくれます。

ここ数年、テーマをきめてきりえ製作をしております。昨年は『八ヶ岳山麓くの山野草VSハワイの花』おとなしくそそと咲く野の花と対照的な自己アピール満載の南国の花々をテーマに……。

そして今年のテーマは『日本の美、茶花』。昨年信濃観月苑での展示の折、体験させて頂いたお茶会、お茶室に入るとりんとした空気の中、日本の美がギュッと凝縮されている感じが致しました。

省いて省いて最後に残った簡素な日本の美にふれたひととき、茶花をきりえにし同時に懐紙の製作もさせて頂きました。主役の和菓子よりもでしゃばらないよう、そして季節の風をなにげなく伝えられるようにと何日も考えてやっと出来上がりました。

これからどんな出会いがあり、どんな方々に出会うのでしょうか?万象我師これからもきりえを通して自己研鑽に励みたいと思います。

ギャラリー展

日達れんげ　きりえ展	4月27日(日)～5月18日(日) 出展／日達れんげ
江間廣・江間廣教室作陶展	6月7日(土)～6月23日(月) 出展／江間廣ほか
藍友禅　橋詰清貫の世界展	6月27日(金)～6月29日(日) 出展／橋詰清貫
HIJIRI 聖　ART EXHIBITION　作品展	7月12日(土)～8月17日(日) 出展／窪田昭人・久保田優子ほか
「窪田孟恒の仕事」あんずのいのちを絵絣に織る	8月22日(金)～8月28日(木) 出展／窪田孟恒
安藤ひかり　ガラス作品展	8月29日(金)～9月18日(木) 出展／安藤ひかり
草木屋 草木染伝習所 作品展	9月20日(土)～10月6日(月) 出展／山崎樹彦・澄子・杜人ほか
岸田怜作陶展	10月8日(水)～11月9日(日) 出展／岸田怜

冬季間は企画展を行うこともあります。（月の里俳句小中学生入選作品短冊展示など）

観月苑文化講座

参加者募集中

山口勝人写仏教室
【第1土曜日】年10回
14：00～16：00
会費／前期・後期とも
各5、000円
講師／安養寺住職山口勝人

御詠歌教室
【第1水曜日】年10回
13：30～15：30
会費／前期・後期とも
各5、000円
講師／法善寺大屋明子

小林一茶の世界
【第3木曜日】
10：00～11：30
会費／月1、000円
（前期・後期とも
各6、000円）
講師／「岳」同人窪田英治

やさしい着付教室
【第2・第4木曜日】
14：00～16：00
会費／月2、600円
（12回シリーズ）
講師／前結び美装流助教授
浅野和子

希望人数により実施
曜日は変更になることがあります

催し物案内

第15回曼陀羅の里 お月見俳句大会　10月11日土

13:00 ～ 16:00
当日句　２句（自由題）
会費／ 1,500 円
（投句料・聴講料・懇親会費）
選者／「信濃俳句通信」主宰・佐藤文子
「黒姫」主宰・神田北童
「岳」編集長・小林貴子
「梟」同人・水上孤城

第22回月の里俳句作品募集

募集締切　8月31日日

大人　３句一組（何組でも可）　投句料／ 1,000 円
小学３年生～中学生　２句まで　投句料／無料
選者／「信濃俳句通信」主宰・佐藤文子
「黒姫」主宰・神田北童
「岳」編集長・小林貴子
「梟」同人・水上孤城

茶室清香亭月釜

松林のなかの茶室にて季節のお点前をお楽しみください。
時間　10:00 ～ 15:00　日時は変わることがあります。
会費／ 600 円
点心＆お抹茶 2,500 円（要予約。３名様以上）

4月13日日	裏千家	小林宗智社中（長野市）
4月29日火	武者小路千家	亀の香茶稽古の会（松本市）
5月18日日	裏千家	小山宗道社中（長野市）
6月15日日	石州流	芳香庵松悠（筑北村）
6月22日日	表千家流	金井宗美社中清流会（筑北村）
7月13日日	裏千家	山中宗艶社中（長野市）
7月27日日	裏千家	公民館茶道クラブ（麻績村）
8月23日土	宗偏流	宮田宗恵社中（長野市）
9月14日日	表千家流	鈴木康之（名古屋市）
9月28日日	武者小路千家	亀の香茶稽古の会（松本市）
11月9日日	裏千家	島津宗純社中（長野市）

第21回紅葉がりの茶会　10月19日日

受付／ 10:00（受付終了 14:00）
定員／ 150 名　会費／ 3,000 円

濃茶席　耕月軒
薄茶席　観月堂
点心席　月の館大寄せの間
この日は通常のお茶席はありません。
施設貸切の場合も同様です。

秋の楽しい音楽会
みんなで歌いましょう！

合唱指導とテノール独唱

10/4 土　14:00 ～ 16:00
場所／月の館大寄せの間
講師・テノール独唱／島津 和平　ピアノ伴奏／関崎 千奈美

遠山望・山川拓也デュオリサイタル

9/7 日　13:30 ～ 15:30（予定）
場所／月の館大寄せの間
●サクソフォン／遠山 望
●ピアノ／山川 拓也
ゲスト●サクソフォン／飯室志津香

【曲目】
二本のサクソフォンのためのソナタ　ルクレール
「タンゴの歴史」より　ピアソラ
「オーヴェルニュの歌」より　カントルーブ　他

土づくりからの陶芸

江間　廣

土づくりから焼成まで、作品に仕上がる過程で、「省力化、簡略化せず、できるかぎり古来の方法で取り組む、自然に反しない」と言う気持ちで作陶しています。宅配便やインターネットの普及により、全国各地の有名陶土が自由に手に入り、デジタルで管理された電気や灯油などの窯で焼き物ができる時代にあります。しかし、このような中にあっても、私にとっては地元に存在する土で、原初的な方法で焼き物づくりをするということが、より大きな喜び、潤いを生み出すような気がしています。

十四年間の会社生活を経て備前で二年間勉強したのち、二十年ほど前当地に穴窯を築き、作陶を続けてきました。信州にあっては信州の土を、と当初から考えていたところ、旧本城村の土と出会い、その数年後、上田市の染屋土にも巡り会うことができました。試行錯誤の連続ではありましたが、「信州の焼締め陶」として、評価をいただけるようになってきました。

江間ちゃんの焼き物には古びた肌合いを感じる、と言ってくれる人がいます。備前の陶芸センターで2年間勉強しただけで、すぐ独立。師を持たなかったために、土の作り方、窯の作り方、焼き方、成形の仕方など、自分なりに考えてきました。古い産地などでは、焼成方法など、ほぼ確立されたものがありますが、本城土そのもの、またその焼き方は未知の世界、太古の人が土から焼き物に仕上げた体験を、私も多少なりともしているのかもしれません。

自然界の中に美を感じる、とよく言われます。それと同様、焼締陶の持つ自然さ、極力人工物が加わらない良さがそこにあると思います。形はともあれ、その肌合いを見るだけ、触れるだけで堪能できるものかもしれません。窯焚きも最終盤、横焚口から、窯の中を覗くと、炎がフワーフワーとゆっくりと流れています。極楽浄土に漂う「霞」に似て、とても心地よい情景です。「土」も炎のフワーフワーを感じ、それを見ながら「焼き物」に昇天しているようです。

土は自然からの授かりもの、自分の子供を育てるように大事に育んでいきたい。私に与えられたこれらの土それぞれの良さを最大限に引き出し、またそれぞれの土に合った形を生み出し、使っていただく方々と共に喜べるよう、今後も研鑽していく覚悟です。心地よさ、やすらぎ、ちょっとした驚き、喜び、「江間ちゃんらしいね。」といわれる作品を作っていきたいです。

三年ほど前陶芸教室を始め、今回、生徒さんの作品も併せて展示させていただくことになりました。私とまったく同じ土を用い、同じ窯で焼いた作品、皆さんが五感をフルに活用して仕上げた力作の数々も、合わせてご覧いただきますよう、よろしくお願いいたします。

江間　廣　略歴

1953年東京に生まれる
1977　上智大学卒業
1990　37歳　陶芸を志す
1992　備前陶芸センター卒業
1994　当地に半地下式穴窯（12m）を独力で築き独立
1997～2011　「しぶや　黒田陶苑」にて毎年個展
1998　半地下式穴窯（6m）を築窯
「東急本店」美術画廊にて個展
2001　NHK「男の食彩」に掲載
2004　「極める技　現代日本の陶芸家125人」に掲載
2005　NHK－BS「器　夢工房」に出演
「井上百貨店」ギャラリーにて隔年個展
2013.　「日本橋三越本店」特選サロンにて個展
2010
2011.　「そごう横浜店」美術画廊にて個展
2014
2011　「そごう大宮店」美術画廊にて個展
2013.
2012　「ながの東急」美術画廊にて個展
2014.
2013　「西武池袋本店」アートギャラリーにて個展
その他各地で個展多数開催

第二十一回 月の里俳句入選作品

一般の部

佐藤文子選

特選

金魚掬ふ見知らぬ人に仕切られて　石橋　博雄
伐り方にさんざん揉めて西瓜食ふ　村田　守

秀逸

水音の方へ向きたる水芭蕉　杉本　憲治
噴水や被爆の空を濡らしをり　小谷　一夫
月浴びて婆の背しやんと帰りけり　宮地　和子

神田北童選

特選

嘶きや遥かな父の盂蘭盆会　永田エセ子
据置きの機関車小鳥来てをりぬ　北沢　雅子

秀逸

月夜茸奥へ奥へと富士樹海　井坂　一炷
清水湧く木地師名残の楡大樹　藤本　光子
塩飴をかりかりと噛む残暑かな　中溝　玲子

小林貴子選

特選

歯車のかみ合うて来る九月かな　成保　房子
胸白く鳥睡りたる良夜かな　志村寿美代

秀逸

供花となす被爆の空の揚花火　小谷　一夫
学生の尻打つリュック秋暑し　田中　竹子
子規の泣き芭蕉の歩き月出でぬ　柴田　洋子

水上孤城選

特選

田に水の入りて鎮もる里の初夏　村田　守
病める子の新涼の髪美しく　西川　房子

秀逸

奉納のトーシューズ提げ寺涼し　松本　郁子
学生の尻打つリュック秋暑し　田中　竹子
朝顔に元気もらいて畑に立つ　宮下志花子

耕月軒の降りつくばい

旬の味 お点前による

点心・お抹茶をお楽しみください

お抹茶
1服 600円

お点前でお楽しみいただけます。

点心
2000円(一例)

一、椀　物　松茸、紅葉麩、三つ葉、鱧
一、焼　物　鮎、きゃら蕗、茗荷甘酢漬け
一、壷　地物と菜花の大根おろし和え
一、煮　物　大根、鰤、青物、針生姜
一、水菓子　南瓜よせ、林檎のワイン煮、苺
一、香の物　ベッタラ大根漬、奈良漬け
一、ご　飯　栗入り赤飯

7日前までに、3名様以上でご予約ください。(季節により内容が異なります)

信濃観月苑をご利用ください

広く文化活動や研修会、お茶会等にどうぞ

お問い合わせ・ご予約 TEL/FAX 0263-67-3933
メール kangetsu@vill.omi.nagano.jp

小間の茶室「清香亭」

■利用料金／1会 10,000 円

ギャラリー

展示発表の場としてご利用ください。

■利用料金／半日 5,000 円・1日 10,000 円

広間の茶室「耕月軒」

■利用料金／半日 5,000 円・1日 10,000 円

音楽ホール

コンサート、発表会などにご利用ください。
グランドピアノ KAWAI GM-10

■利用料金／半日 5,000 円・1日 10,000 円

大寄せの間（2F 40 畳和室）ステージ付

お茶会、お稽古、句会、研修会、コンサート会場などにご利用ください。

■利用料金／半日 3,000 円・1日 6,000 円

観月堂

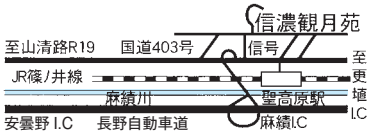
お茶会、句会、月見の宴などにご利用ください。

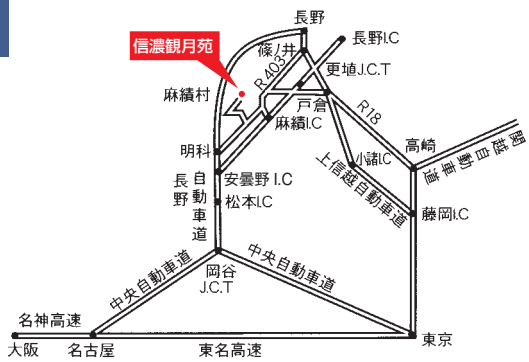
■利用料金／半日 5,000 円・1日 10,000 円

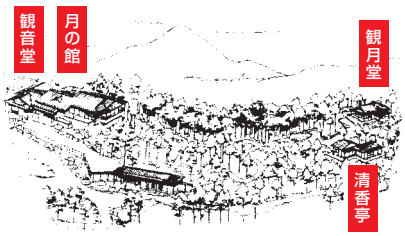
信濃観月苑

長野県東筑摩郡麻績村〒399-7701
TEL/FAX（0263）67-3933

開苑時間	午前 9 時～午後 5 時
休苑日	毎週火曜日（火曜祝祭日は開苑、水曜休苑）
入場料	個人　高校生以上 300 円 小人　150 円 団体　20 名以上 2 割引
お抹茶	600 円
点心	2,000円（3名様より。要予約）







麻績村のホームページ　http://www.vill.omi.nagano.jp
麻績村観光情報　http://omigoto.vill.omi.nagano.jp

表紙

多くの方々のお力添えをいただき様々な催しができますことに感謝。

みなさまが心豊かに日々過ごせますように…